夏祭夜行

ハレルヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏祭夜行

【Ｎコード】
Ｎ９４６０Ｎ

【作者名】
ハレルヤ

【あらすじ】
子供の頃に経験した不思議な出来事。
お祭りは人間だけのものではないということを知った夜だった。

僕がちょうど小学5年の時に家庭の事情というやつで母方の爺ちゃんの住む田舎に一年ほど暮らしていたことがある。もともと住んでいたのは地方の都会のようなところ。自然を壊して道路が出来る。いつも工事の音がして、空が霞んでいた。そして、僕と二歳下の妹ユキは何もない田舎暮らしをはじめた。

はじめに僕が思ったことはうまく馴染めるかという事。しかし、従兄のカツヤとは以前からの顔なじみだったし、やつがそこら辺で一番のガキ大将だったこともあり、学校にも馴染む事が出来た。学校といっても50人かそこらしか居ない。同級生のアヤが妹のお姉さん代わりになり、笑う事が多くなった。

毎日、泥だらけになって遊んでいるうちにすぐに夏休みになってしまった。こんな田舎でも夏には一大イベントがある。村外れにある神社で行う夏祭りだ。なんでも四百年以上の歴史があると爺ちゃんが言っていた。沢山の出店、賑やかなお囃子。子供にはそれが夜の帳に浮き上がる桃源郷のように思えた。

夏祭りの夜、僕らは親にねだったほんの少しのお金を持って神社へと駆け出していた。先頭は従兄のカツヤ、次が僕、そしてアヤと妹、そして最後はアヤの従弟のトオル。いつもつるんで遊んでいるメンバーだ。綿菓子を買ってみんなで食べたり、お面を買ったり。目一杯、お祭りを楽しんでいた。

楽しいお祭りに水をさすやつが現れた。カツヤの喧嘩相手のマサたちだ。あいつらは何かと理由をつけて僕たちに因縁をつけてくる。マサたちに見つからないように僕たちは神社の神殿の裏側に回りこ

んだ。そこには大昔から在る「神岩」があってしめ縄がかかっている。僕たちは「神岩」の裏側に隠れた。

岩がひんやりして気持ちよかった。みんなでウトウトとしはじめた頃、遠くから声が聞こえてきた。「おい、早くしろよ。宴はもう始まってるぞ」うっすらと眼を開けようとしたとき、体が岩の中に吸い込まれる感じがした。気が付くと篝火で照らされた地面に投げ出されていた。咄嗟に周りを見渡した。

やけに視界が狭いと思ったら、縁日で買った狐のお面が顔の前に来ていた。他の四人も僕の周りでむっくりと起き上がっている。後ろからまた声がした。「ごめん、ごめん、急いでいたから前をよく見ていなかった」振り返るとそこには狐のお面の若者らしい男が三人立っていた。「さあ、宴に加わろう」

狐のお面の男に手を引かれる。大勢の声がする。よく見ると周りには同じような狐の仮面をつけた人々が何かを飲んだり、食べたり、笑ったり、踊ったりしている。不思議なことにお面をはずすことなく食べたり飲んだりしていた。中心にはあの「神岩」があり、その前には白髪の狐爺さんが座っていた。

「おい、そこの若いの」狐爺さんが僕らを呼び止めた。杯に入ったお酒のようなものをよこした。「楽しんでおるか？」僕は他のの四人を見回した。なぜかみんな狐のお面を被っている。そして、どうすればいいかわからずモジモジとしていた。不意に狐爺さんが言った。「むむ、お前らわらしじゃないか」

観念して僕たちは狐の仮面を取った。しばらく覗き込んでいた狐爺さんは大きな声で笑いながら言った。「珍しい客人が来たぞ。みんなもてなせ」僕らの前には見たこともないご馳走が並んだ。勧めら

れた杯にはお神酒が入っているが、人間の言うお酒ではないらしい。甘い香りがする不思議な味だった。

アヤと妹のユキは女の狐さんと嬉しそうに話している。カツヤはが体の大きい狐さんと相撲をとっていた。トオルはその横でカツヤの応援。僕は狐爺さんに話を聞いていた。この宴は狐の神様のお祭りで千年も前から続いている。人間が偶然に数十年に一回ほど参加することもある。今回の僕らがそうだ。

楽しい宴は続いた。気が付くと遠くで鶏の鳴く声がした。「一番鶏じゃ。そろそろ宴も終いじゃ」狐爺さんが叫ぶと1人また1人と狐さんが消えていった。僕らは来るときにぶつかった狐さんに手を引かれて神岩へと近づいた。狐爺さんはみんなにお土産じゃといって小さな狐の形の緑色の石を手渡した。

「困ったときに力になってくれるはずじゃ」狐爺さんは言った。僕らは来るときと同じ奇妙な感覚にまた覆われた。気が付くと、朝の光のさす「神岩」の前に寝そべっていた。神社の表のほうから大きな声がした。「おおい、いたぞー」後から聞くと僕らは一晩中姿が見えないと捜索されていたらしい。

家に帰っても爺さんたちは怒らなかった。なんでも大昔同じようなことがあって、神隠しにあった子供は幸せになったという言い伝えがあるかららしい。その後も僕ら5人は仲良く遊んだ。次の年の春、僕と妹はもと居た所に帰ることになった。なぜか両親の仲がよくなったらしい。これも狐石のお陰。

あの夏からもう何年もたった。従弟のカツヤは今、プロのミュージシャンとして活躍している。同級生のアヤはアメリカで医者になった。トオルはなんとプロ野球選手になった。妹のユキは結婚してフ

ランスにいる。僕は小説家として、この村に住んでいる。今も昔も変わらない風景の中、夏祭りがまた来る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9460n/

夏祭夜行

2010年10月9日17時29分発行